

「2013 自治労青年女性オキナワ平和の旅」参加報告書

滝川市職員労働組合 林 美穂

□はじめに

2013年12月8日（日）～10日（火）にかけて開催された「自治労青年女性オキナワ平和の旅」に参加しました。

これまでも何度か沖縄へ行ったことがあります。今回の旅のように「ガマ」や「ひめゆり資料館」など、戦争の悲惨さを今に伝える場所には行ったことがなく、今まで詳しく知らなかった「沖縄の顔」を直視できるか不安でしたが、実際に沖縄に行き戦争体験者のお話を聞き、激戦地だった場所を自分の目で見たことで、平和を守ることの大切さ、戦争の出来る国にしないことの重要性を学ぶとともに、二度と同じ過ちを犯してはいけないという思いを今まで以上に強く持つようになりました。

■1日目（12月8日 13:00～17:00）

初日は2本の講演を拝聴しました。1本目は九州・沖縄平和研究所長 中村元気氏による「侵略の歴史と自民党憲法改正草案」。中村氏の講演では、自民党が作った憲法改正草案の持つ危険性について詳しく学びました。草案の中には「国防軍を保持する」「内閣総理大臣及び全ての国務大臣は、現役の軍人であってはならない」（退役軍人は大臣になっても良いということ）などと書かれており、今の憲法とは内容が大きく異なっています。そもそも今の憲法は、国民を縛るためのものではなく、天皇や大臣、国会議員、公務員の暴走を防ぐためのものです。しかし自民党案では「全て国民は、この憲法を尊重しなければならない」（ここでいう「国民」に天皇は含まれていません。）となっており、憲法の趣旨が全く違うものになっています。先日強行採決により「特定秘密保護法」が成立したことや共謀罪の創設に向けた検討が開始されたこと、武器輸出三原則の「例外」として韓国軍へ銃弾を提供したことなど、戦後長い時間をかけて築いてきた日本の平和が、国民の知らないうちに変わりつつあることに不安を覚えます。気付いたときには手遅れだった、ということのないように、国の動きを「他人事」と捉えず、常に関心を持つことが必要です。「平和の一番の敵は無関心。戦争の一番の友は無関心。」これは中村氏の講演の最後に聞いた言葉です。この言葉を一人ひとりが心に刻むことが、平和を守ることに繋がるのではないかと思います。

2本目は「今、問い直す、沖縄戦」と題した沖縄国際平和研究所理事長 大田昌秀氏による講演でした。『教科書には「沖縄戦は昭和20年4月1日に始まり、同年6月23日に終結した」と記載されている。しかし、本当は昭和20年3月26日に始まった。4月1日というのは米軍が沖縄本土に上陸した日だが、3月26日には沖縄県の離島・慶良間島で集団自決があり、そこからが沖縄戦の始まりだという方が正しい。また、6月23日というのは牛島司令官が自決した日、すなわち組織的な戦いが出来なくなった日であり、実際には9月7日まで戦いが続いた。』これは大田氏の講演で語られたことです。大田氏は自らも戦争に駆り出され、ひどい怪我を負



いながらも、なんとか一命を取り留めた人の一人。大田氏曰く「沖縄戦は日本本土を守るために行われた。いわば沖縄は捨石にされた」という思いが沖縄には根強く残っているそうです。制海権・制空権は米軍に握られており、勝ち目のない戦いのために、兵士だけでなく一般の住民までもが巻き込まれた沖縄戦は、米軍の従軍記者の言葉として「醜さの極致だった」と語られています。

集団自決は、捕虜となって生き延びることを厳しく否定した当時の教育の影響であり、食べ物が底をつき、間もなく餓死することが予想されるなか、「どうせ死ぬなら家族みんな」といってやむを得ず行われました。親が子を殺し、そして自分も死んでいく。今私たちが生きる社会では一家心中は「非日常」と言えますが、当時の沖縄では「日常」とまでは言えなくても、珍しいことではありませんでした。それくらい追い詰められて苦しんで、最終的に死を選んだ人たちがいたことを知りました。

また、沖縄戦の際、方言で喋ることが禁止され、方言を喋った人はスパイとして処刑されました。これは沖縄戦の特徴とも言えるそうです。方言しか喋ることのできない高齢者が大勢いる中で、この「命令」を守れずに処刑される人が何人もいました。ただ自分の言葉を話すだけで殺されるというとても理不尽なことがまかり通っていた戦争に改めて恐怖を感じました。

沖縄戦で生き延びた人の男女比は男性 38.04%、女性 61.96%であり、圧倒的に女性が多いそうです。これは兵士として多くの男性が駆り出され、戦死したということでもありますが、一方で戦後の復興は女性たちの手によって行われたということでもあります。命は助かったけれども、その後の復興で女性たちには大変な苦勞が待っていました。戦地に赴き無念の死を遂げた人、生き残ることができた人、どちらにとっても苦しみしか残りません。沖縄では今でも精神に異常をきたす人が他県よりも多いとのこと。これは戦争を経験したことの影響であると考えられています。戦後 70 年近く経った今でも、心の傷は癒えていません。また、沖縄の大地には今でも多くの遺骨や手榴弾等が埋まっていて、すべてを掘り起こすまでにはあと 60~80 年かかると予想されています。このことから沖縄戦はまだ完全に終わったとはいえ、沖縄以外の地で生きる私たちも、戦争を過去の出来事にははいけないと思いました。

■2 日目 (12 月 9 日 8:15~19:20)

2 日目は朝 8 時過ぎから夕方 7 時過ぎまで、参加者が 5 台のバスに分乗して「ひめゆり平和資料館」や「糸数壕」、辺野古などを回るフィールドワークを行いました。

バスに添乗して下さった沖縄県本部の方から以下のお話を伺いました。

「米軍関連が沖縄経済に占める割合は昔は 15%と高かったが、今では 5%ほど。米軍基地がなくなると沖縄の経済が立ち行かなくなるというのは間違い。雇用に関しても米軍基地内で働けるのは英語の話せる外国人が殆ど。日本人の雇用には結びついていない。また、沖縄は先祖をととても大切にす。でも、基地内にお墓があり、お墓参りにすら行けない人がいる。」

「沖縄から基地がなくなると失業者が増え、経済に大きな悪影響を与える」という話をマスコミを通して聞いたことがあります。しかし、実際はそんなことはなく、基地がある「沖縄の一等地」を返還してもらえれば商業施設を建設して雇用が増えたり、固定資産税が今よりもずっとたくさん入ってきたりと住民にとって良いことがたくさん起こります。経済以外にも、基地がなくなれば住民が感じている不安が解消され、安心・安全が守られる等、様々な好影響があります。確かに一部の住民にとって基地は雇用の場であり、収入源であるかもしれませんが、「みんなにとって良いこと」は何かという観点から考えると絶対に基地は無くさなければならぬと思いました。

○ひめゆり平和資料館

沖縄戦が始まると沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校の生徒 222 人（ひめゆり学徒隊）と教師 18 人は那覇市の南東 5 kmにある南風原^{はえばる}の陸軍病院に配属されました。そこで彼女たちが行ったのは負傷兵の看護や水汲み、食事の用意、死体埋葬等。ひめゆり学徒隊の女学生たちは仮眠を取る間もなく厳しく辛い任務に当たっていたそうです。戦況が悪化すると薬や包帯などの医療器具は不足し、兵士の負傷した足や手を切断する手術も殆ど麻酔の効かない状態で行われました。ひめゆり学徒隊は暴れる兵士をおさえつけ、手術後には切断された手足の処理まで行っていたと資料館には記されていました。ごく普通の明るい青春時代を過ごしていた彼女たちにとって、それは辛くて辛くてたまらない毎日だったに違いありません。資料館に展示された文章や遺品、彼女たちの写真を見ているだけで悲しくなると同時に、なぜこのような悲劇が起こってしまったのかという疑問と、自らを犠牲にしてもお国のために働けということを徹底して教え込んだ当時の教育の怖さを感じました。

○糸数壕

糸数壕^{なんじょうしたまぐすく}は南城市玉城字糸数集落にある全長 270mの自然洞窟です。沖縄戦では住民の避難場所、日本軍の陣地として利用され、のちに南風原陸軍病院の分室として使用されました。ひめゆり学徒隊が大勢送り込まれた場所でもあります。病院とはいっても真っ暗な壕の中に粗末な二段ベッドを置いただけの場所でしたが、一時は 600 人以上の負傷兵で埋め尽くされたそうです。



ヘルメットをかぶり、懐中電灯を持って壕に入りました。まず、入口はとても狭いうえに非常に急な階段になっています。足元は滑りやすく、ゆっくり歩いていても何かにつかまっていないと転んでしまいそうになります。当時ひめゆり学徒隊の方々は外から水を汲んできたり食事を運んできたりしたと聞きましたが、この入口を重たいものを持って通るといことがいかに危険で過酷な任務であったかということが、実際に壕に入って良く分かりました。

壕の一番奥には負傷兵を寝かせておいた場所があります。そこは「使えない」兵士が収容されていた場所。治療して戦地に送り出すことが可能な兵士は「使える人」としてベッドに寝かせてもらったり、薬や食事が与えられたりしましたが（満足いくような量が与えられた訳ではありません）、破傷風や脳症になり二度と戦地に行くことができないと判断された兵士は「使えない人」として、放置されたそうです。人間が「モノ」として扱われていたということであり、あまりにも酷い仕打ちが行われていたことを知り、言葉を失いました。この「使えない」兵士が放置されていた区域にひめゆり学徒隊が立ち入ることは禁止されていました。理由は、「お国のため」に命を危険にさらした人々に対する仕打ちを目の当たりにすることで、純真な女学生の愛国心や忠誠心に疑念が生まれることを危惧したからです。ということは、少なくともその指揮を執っていた人はそういった兵士に対する対応が正しいことだとは思っていなかったということだと思います。正しいとは思えなくても国の方針に従わざるを得ない。それだけ国が絶対であり、そこに背くということが不可能な社会だったということです。

壕の中には「慰安所」があったと聞きました。少女と呼ばれる年代の女性が連れてこられ、兵士の相

手をさせられていました。連れて来られた少女は地元の住民で、壕の中では家畜飼育所に入れられ、夜になると慰安所で働かされていたそうです。

地元の住民は壕の一番出口に近いところに避難していました。そこは外の光が差し込むほど外に近い場所であり、一番危険に晒される可能性が高い場所でもあります。また、同じ場所に「監視所」というものもあったとのこと。この「監視所」は敵の攻撃を監視するために置かれたものではなく、住民が外に出ることでこの場所に壕があることを敵に知られないように、日本軍が住民を監視するために設置されていました。軍は住民を守るよりも、自分たちの安全を最優先に考えていたということはこの事実は物語っています。沖縄戦ではこういったことが様々な場所で起こっていたと知りました。これが沖縄戦の真実であり、人間に想像を絶するような残酷で惨いことをさせてしまうのが「戦争」なんだということが糸数壕の見学を通してよく理解できました。



糸数壕の出口には多くの千羽鶴が
供えられている

○辺野古

名護市辺野古に基地を移設するかしないか。

名護市民の住民投票では反対派が多かったし、現市長（稲嶺進市長）は辺野古への移設に反対しています。しかし、政権与党である自民党は辺野古への移設をなんとしても実現しようとしています。また、沖縄県選出の自民党国会議員たちも選挙の公約では「反対」であったにも関わらず、今では「移設やむ無し」に意見が変わったそうです。

沖縄県の面積が日本の国土に占める割合は0.6%しかありません。そこに日本国内に置かれている米軍基地の75%が存在しています。基地があることで米軍機の離着陸の騒音に悩まされたり、墜落等の事故が起こり住民にも被害が出たり、米軍兵士による犯罪が後を絶たなかったりと、沖縄県民は私たちが考えるよりも多くの危険・不安と隣り合わせの生活を余儀なくされています。仮に普天間飛行場を辺野古に移設したとしても、県内から基地がなくなるわけではないので何も解決しません。たらい回しによる問題の回避をするのではなく、住民が安心して暮らし続けられる環境を沖縄に作っていくためには、基地をなくしていくことが不可欠だと学びました。



ジュゴンやウミガメ等、貴重な生物が生息する
辺野古の海



設反対を訴える数多くの旗

○嘉手納道の駅

嘉手納の道の駅からは嘉手納基地を見ることができます。展望台に上がると、米軍機の離着陸がよく見えます。また、それに伴う音もよく聞こえます。基地の周りには一応の防音壁が設置されていますが、十分な高さはなく、防音の効果は殆どないように感じました。基地周辺の住民は毎日この騒音を聞きながら生活しています。たった30分滞在しただけで、何機もの離着陸を目にしました。毎日1度や2度ではない騒音に耐えながら生活することの不快さは想像以上だと思います。辺野古に引き続き、ここでも「基地をなくすべきだ」ということを強く感じました。



道路や畑のすぐ傍にある「嘉手納基地」→

■3日目（12月10日 8:40～12:00）

「軍隊がいた島」というDVDを視聴したあと、「対馬丸記念館」を見学しました。

「対馬丸」というのは、高齢者や幼い子どもたちを県外へ疎開させるための船で、昭和19年8月21日に那覇港を出発し、翌22日の夜10時過ぎに米軍の魚雷攻撃により海に沈められた船です。今では考えられないことですが、事件が起こった当時、実態調査は一切行われなかったそうです。このため対馬丸に関する正確なデータは残っていませんが、2005年7月27日現在の「対馬丸記念会調査データ」によると、乗船していた人は疎開者・船員等を合わせて1,788人で、うち子どもは834人。犠牲者は1,482人にもものぼるそうです。「修学旅行みたいで楽しい」「富士山や雪が見られるかな」と旅行気分だった子どもや、親や兄弟から離れることへの不安や寂しさを堪えながら仕方なく乗船した子どもなど、様々だったとのこと。乗船者は窓ひとつない蒸し風呂のような船倉に詰め込まれ、攻撃により沈没してからは真っ暗で果てしない海の上で、いかにしながみつきながらいつ助けが来るかもわからない中で漂流していたそうです。また、生存者には厳しい箱口令がしかれ、事件のことを人に話すことはできませんでした。このことにより、生存者は辛くて苦しい体験を自分の中に閉じ込めておくしかなく、二重の苦しみを抱えて長年生きていくことを余儀なくされました。

夢や希望を持った幼い子どもが大勢犠牲になった事件。犠牲になった子どもたちは「なぜ自分が死ななければならないのか」「自分は何か悪いことをしたのだろうか」という無念を小さな胸に抱えながら海へ沈んでいったはずです。そういう思いをする子どもたちを二度と生み出さないためにも、今を生きる私たちには平和を守っていく義務があると感じました。

□おわりに

3日間の旅を通して、戦争がどういうものであったのか、過去に日本は何を行ったのか、平和を追い求めることの意味、そして戦後約70年経った今でもなお、戦争を語り継いでいく必要があることを学びました。どんな理由があるにせよ、「正しい戦争」なんて一つもありません。また、戦争の先にあるのは悲しみだけであり、勝った国にも負けた国にも、幸せは訪れません。日本は先の大戦によって多くの尊い命を失い、戦争がもたらすものを学んだはずですが、しかし今、恒久平和を誓ったはずの憲法が、政治の

力によって変えられてしまう可能性が浮上しています。安心して明日を迎えられる社会、子どもたちが夢や希望を持って生きていける社会を築き上げていくためには、歴史を学び、二度と同じ過ちを犯さないことを誓うとともに、政治や社会の動きに関心を持ち続けることが必要です。「国が悪い」「政治が悪い」と他人のせいにしても何も始まりません。平和を守り抜くのは私たち一人ひとりの「平和を願う気持ち」だと思います。この旅によって私はその気持ちが以前よりも強く、明確になりました。私が今回の旅で学んだこと、感じたことを1人でも多くの仲間に伝え、平和の輪を広げていきたいと思っています。